令和４年度　福井県立清水特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
【教務部】 1 教育課程・学習支援	個別の教育支援計画をもとに、学習面や生活面におけるつながりについて検討しながら授業改善に取り組む。	「個別の教育支援計画」の重点課題をもとに「個別の指導計画」を作成した。授業実践では、授業アセスメントシート（観点別目標を明記）に、授業の目標・内容・支援方法・児童生徒の様子などについて記録し、学部研究会の話し合いのツールとして活用した。授業における目標や児童生徒の様子を受けて、学習面や生活面における実態を把握しながら学びのつながりを検討したことで、教員間での情報共有が図られ、統一した指導支援を行うことができた。今後は、授業実践を重ねる中で、教員同士の語り合いや児童生徒の行動の見取りなどを通して、さらに教師の専門性を向上させていくことが必要である。	授業実践では、丁寧な実態把握や教師間の密な情報共有が大切である。丁寧に実態把握を行い児童生徒の行動の背景を考えながら、学校生活での学びが家庭生活や社会生活にも活かされていくような授業づくりを行う。 授業改善の経過と児童生徒の行動の変容を保護者と共有することで児童生徒への指導について共通理解を図る。
【指導部】 2 生徒支援	新しい生活様式を徹底し、感染症の予防や拡大防止に努める。	①学校行事や避難訓練等における感染症対策、②感染防止のための環境整備や持続可能な仕組み作り、③保護者への啓蒙や情報提供、協力の依頼等を徹底し、確実に行った結果、明らかな校内感染やクラスターの発生を防ぐことができた。また、すべての保護者から感染症対策について満足しているとの評価を得た。報道等によれば、政府は感染症の分類や感染症対策の見直し等を検討しているとのことである。文科省や県からの通達等に従い、本校の実情を勘案しながら確実で合理的な対策ができるよう本校の感染症対応マニュアル等を見直す必要がある。	教職員に対して、文科省や県から出される通達や新たな情報、知見等を周知徹底するとともに保護者に情報等を提供し共通理解を図りながら協力を得ることができるよう、より連携を密にして感染症対策を継続していきたい。
【支援部】 3 進路支援	福祉サービスについての情報を収集し、在学中の支援に生かす。	保護者参加の進路に関する行事は新型コロナウイルス感染症対策を行いながら実施した。質問等については懇談等や「進路だより」を活用する等工夫して情報提供した。事業所見学や進路座談会に参加した保護者から「将来について考えるよい機会になった」等の感想が得られ、進路への理解が進んだことが伺える。参加しやすいよう、日程や回数を増やしてほしいとの要望もあった。教員は事業所見学や研修会に参加したり、資料に目を通したりして情報収集に努め、それらを活用して児童生徒への支援に生かせたと評価している。 今後は、進路アンケートや、懇談会、連絡帳なども活用し、保護者や担任と連携しながら一人一人に合わせた支援を考えていけるとよい。	事業所見学や進路座談会については、今後も保護者からの進路アンケートを基に、見学先や話し合いの内容、日程、回数などを検討し実施する。 教員は、引き続き学校での進路支援や生活支援に結びつく情報の収集に努め、保護者と丁寧に共通理解を図りながら日々の支援を行う。
【支援部】 4 校内支援	関係者（保護者、教職員、関係機関等）と連携しながら、児童生徒に必要な支援を行う。	校内支援相談会に各学部から多くの教員が参加し、お互いの経験をもとに活発な意見交換が行われた。学部を超えて教員が話し合うことで情報を共有、連携し児童生徒の一貫した指導及び将来を見通した支援に繋げたり、教員の専門性の向上を図ったりすることができた。スクールカウンセラーと連携し心理面からのアドバイスを受け、また、保護者にも必要に応じてカウンセリングの時間を設ける等の必要な支援を行えた。	今後も校内支援委員会と学部が連携したり、教員とスクールカウンセラーが情報を共有したりすることで、必要な支援を検討したり、考えたりする。また、それらの支援を、家庭や児童生徒が利用する施設関係者と共有し、校外での支援にもつなげられる機会を持つ。

【各学部】 5 地域との交流	学校間交流や居住地校交流、地域との交流、地域主催の作品展参加、校外学習等いろいろな活動を通して、児童生徒が同世代や地域の人々と有意義な関わりができるように支援内容や環境設定等工夫する。	【小学部】遠隔での学校間交流1回目はお互いの存在をより感じてもらう活動として絵を共同制作し、話し合いながら作り上げていく過程で相手とのコミュニケーションを例年よりも取ることができた。しかし、会話ができない児童のやり取りの場面では、手を振る、絵カードを使う、教師が代弁する等が精一杯で児童の意思を本当に表現できているかが課題として残った。居住校交流では、紙芝居やICT機器を使って自分で画面操作して話をしたり発信したりする自己紹介の場面を設定した。クイズ形式にして本校への理解を促す内容を扱う等したことで相手校児童も興味を持って聞いていた。参加する授業は共に主体的に活動できるように工夫して実施したが難しさもあり、児童の特性に応じて実体験的な事前学習が必要なのかもしれない。	直接交流した2回目の感想の方が活動に前向きな意見が大多数であり、本校児童も積極的にやり取りしていたことから学校間交流、居住地校交流ともに新型コロナウイルス感染対策の方法や状況を見極めながら内容を吟味して直接交流を行なっていきたい。また、居住地校交流では、保護者の願いを連絡帳や懇談等で丁寧に聞き取り、活動に反映できるように努めていきたい。
		【中学部】学校間交流校生徒への出前授業では合理的配慮についてイラストを提示し、合理的配慮の意味について考える機会を設けた。事後アンケートでは、本校生徒への理解が深まった等の内容が記されており、出前授業で伝えたことが実践場面で生かされた。本校生徒に対しては、「どうぞ」「ありがとう」のやり取りや実物・カード類を使用しての選択等学校生活で学んだことを交流相手と実践的に行うことで、見通しや自信を持ちながら関わることができた。校外に出掛けて地域の人と関わったり、作品展で多くの人に作品を鑑賞してもらったりすることで、本校生徒や特別支援教育への理解・啓発の一助となった。	今後も学校間交流を通して、事前学習や出前授業でお互いの学校の生徒のことを知る機会を設け、本校生徒自身の人への関わりを深めたり、中学生に対する、本校の生徒や特別支援教育への理解促進に努めたりすることが必要である。また、校外学習や作品展を継続し本校生徒への理解・啓発に努めることが必要である。
		【高等部】学校間交流では、普段の授業の様子やコミュニケーションのポイントなどについて出前授業を行い、本校の生徒の得意なことや好きなこと等についても伝えた。１週間前には遠隔での事前交流を行い、お互いの様子を知り直接交流への期待感が高まるようにした。こうした取組の結果、直接交流当日には、本校生徒のペースや特性に合わせて関わろうとする様子が見られ、また、個々の好みに合わせた手作り品がプレゼントされた。地域との交流（すみれ荘）では、昨年度の写真を見せたり、利用者の方々がとても喜んで感謝していたことを伝えたりした。これにより、今年度も自分たちの手作り品をプレゼントしたいという気持ちが強まり、プレゼント作りや贈呈の練習の場面で生徒たちのモチベーションを高めることにつながった。	来年度も地域との交流や学校間交流を継続し、プレゼント作り等相手に喜んでもらえるような活動を行ったり、活動を共にする中で相手との親近感がより増したりするようにしていきたい。そのための活動内容の工夫や交流先との打ち合わせを十分に行うようにしたい。